

氏名	田 中 克 子
学 位(専攻分野の名称)	博 士 (医 学)
学 位 授 与 番 号	博 乙 第 2312 号
学位授与の日付	平成 3 年 9 月 30 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学 位 論 文 題 目	三才児健康診査の評価 — 検尿の意義と判定方法 —
論 文 審 査 委 員	教授 武田和久 教授 清野佳紀 教授 太田善介

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

3才児健康診査の際に実施されている尿検査について、その方法、項目、判定基準、事後フォロー体制を公衆衛生学的立場から評価する目的で、昭和55（1980）年1月1日から、昭和60（1985）年12月31日までの間に、Y市M区保健所における3才児健康診査を受診したすべての受診児、男児4,490名と女児4,125名の計8,615名を対象に、3才児健康診査時の尿検査受診児の検尿結果を分析し、さらにその期間の検尿陽性児250名と1980年度の検尿陰性児1,343名の中から男児、女児とも各250名を無作為抽出して追跡調査を実施した。結果は以下のとおりであった。①3才児健康診査時の検尿については、来所時の随時尿を用い、蛋白と潜血について、“±”の判定を慎重に行うことによって、“+”以上をハイリスク・グループとして、その後の経過を追跡観察し、学童検尿へと引き継いでいく方策が能率的である。②二次検尿については、早朝尿とすることによって、False positiveを減少させることが可能である。③要精検児に高率に学童検尿でも有所見者が出現しており、しかも3才児健康診査時の検尿結果が学童検尿に活用されていない現状から、これらを結びつける情報管理の必要性が認められた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、三才児健康診査を取り上げ、尿蛋白、尿潜血判定基準の事後措置における意義を検討したもので、尿蛋白あるいは尿潜血のいずれかが+以上を要精検児とすることにより、高率に有所見者を見いだすことができ、追跡調査における5年後の学童検尿の結果とも高い相関を得ており、公衆衛生学的立場から意義ある知見を得たものと認める。

よって、本研究者は、医学博士の学位を得る資格があると認める。